

論文

## ジュニャーナガルバの『二諦分別論』と ダルマキールティのプラマーナ論

——後期中観思想の形成(4)——

森山清徹

〔抄録〕

以下、ダルマキールティの理論を初めて活用、批判した論師であるジュニャーナガルバの二諦の峻別基準を探求する。『二諦分別論』SDK4において、三条件を具えた立証因により導かれた推理知は欺かない故、勝義であるとの見解に対し、それを実世俗と位置付ける。そこにはプラマーナに関して勝義と実世俗との対立軸が知られる。SDV *ad* SDK9-11において遍計された実としての生起等の否定に関する論議、及び所取能取を欠いた依他起を真実(対比されるものの有を表す相対否定)と見るか、実世俗(否定のみの単純否定)と見るかを巡りディグナーガとの論議が見られる。SDK17-19では遍計されたものの否定の推論の成立に関しダルマキールティによりPVSVに表される分別知における顕現をダルミン、ダルマ、喩例とする方法を活用するが、この場合も二諦を巡る論議が表わされる。SDK8において正しい直接知覚を実世俗、学説により増益されたものを邪世俗とし、SDK12においては、水と蜃気楼とを具体例とし、欺かない結果が獲得される場合を実世俗、欺きがある場合を邪世俗とする。それは正しい推理か否かを基準としている。SDK8、12における実世俗と邪世俗との峻別の基準はダルマキールティのプラマーナ論にある。このことが『二論分別論』の根幹であり、その後、後期中観派の伝統を形成するものとなる。他方、勝義としては直接知覚を有形象知、無形象知、自己認識の点から論難し、推理に関してはアポーハ論に基づく因果論を因果間の区別と無区別との随伴関係の不成立を根拠に論難し、勝義は一切の生、不生、空、不空を離れた無戲論というナーガールジュナ以来の中観の伝統に立脚する。またSDK6、24ではディグナーガと繋がりのある瑜伽行派の論師、トリラトナダーサの無形象知識論が論難され、それは形象虚偽論としてMAK60でも論難される。

**キーワード** ジュニャーナガルバ、『二諦分別論』、ダルマキールティのプラマーナ論、非実在の否定、トリラトナダーサ

I. ジュニャーナガルバの『二諦分別論』(SDK, SDV)

それは、二つの真理、勝義諦と世俗諦とにより中観思想の正当性を明らかにするものである。それは、その後のシャーンタラクシタの『二諦分別論注』SDPはもとより『中観莊嚴論』MAV *ad* MAK、カマラシーラの『中観莊嚴論注』MAP、『中観光明論』MĀ、ハリバドラの『八千頌般若經大註』AAAなどにおける後期中観思想形成の先駆けとなった。その二つの真理を立てる基準として、ダルマキールティの直接知覚、推理からなるプラマーナ論及び因果論さらには瑜伽行派との間では三性説に関する論議が展開している。それはダルマキールティや瑜伽行派が勝義と位置付けるものを、ジュニャーナガルバは世俗とし実世俗と邪世俗とに二分するうち実世俗に位置付け、その基準としてダルマキールティによる結果を設ける効力 (*arthakriyāsamartha*) を採用している。以下、今回扱う『二諦分別論』の内容の分析を通じ対論者の特定とその見解及びそれに対するジュニャーナガルバの論難と弁明とを表しておく。

(1) SDV *ad* SDK4 プラマーナ勝義論と世俗論：

対論者は欺かない論理 (*rigs pa, nyāya*) は勝義である (SDK4ab) とし、直接知覚と共に三条件を具えた立証因によって導かれた推理知を勝義と位置付けている。注釈 (SDP18a3) によれば、論理とは同一性 (*tādātmya*) と因果性 (*tadutpatti*) とを特徴とする必然的關係 (*prati-bandha*) を意味している。それは、以下のダルマキールティの理論を指している。

NB II. 25 *te ca tādātmyatadutpattī svabhāvakāryayor eveti tābhyām eva vastusiddhiḥ* また自性と結果との [立証因に] だけ同一性と因果性と [の必然關係] が存在するから、その両者によってだけ事物であることが証明される。(Cf. NB3.33)

PV III. 1 及び 3には、プラマーナは二種 (正しい直接知覚と正しい推理) であり、それは結果を設けることに関して能力があることであり、勝義である。その能力のないものが非プラマーナであることが表されている。

PV II. (量) 3abc *pramāṇam avisamvādi jñānam arthakriyāsthitiḥ / avisamvādanaṃ* プラマーナとは欺かない知である。欺かないこととは結果を設けることが成り立つことである。

PV III. 69abc *pramāṇam avisamvādāt tad* 欺かないから、それはプラマーナである。

NB I. 15 *arthakriyāsāmarthyalakṣaṇatvād vastunaḥ* 事物には結果を設ける効力があるからである。

欺かないこと = 効力を有する結果を獲得すること = 事物 = それへと導くプラマーナ = 勝義

また推理は迷乱ではあっても、結果を設けること (*arthakriyā*) に関して欺かないからプラマーナであることは PV III. 56-58 において表されている。

*abhiprāyāvisamvādād api bhrānteḥ pramāṇatā / gatiḥ apy anyathā dṛṣṭā // 56abc //* [推理は] 迷乱ではあるけれども、意図された [対象] に対して欺かないから (Cf. SDV 6b6 *don byed pa la slu ba dañ mi slu ba yin par nes par byas nas*) プラマーナである。誤って知られるもの (*gati, the being understood*) であっても、(結果に対して欺かないことが) 経験され

る。

mañipradīpaprabhayor mañibuddhyā 'bhidhāvataḥ / mithyājñānāviśeṣe 'pi viśeṣo 'rthakriyāṃ prati // 57 // 宝石と灯火とから起こったものを、宝石と認識して走り寄ることには (Cf. PV III. 12, apravarttanam) 誤った知という点で相違はないけれども、結果を設けることに関して (Cf. SDV 6b6 don byed pa la) 相違がある。

yathā tathā 'yathārthatve 'py anumānatadābhayoḥ / arthakriyānurodhena pramāṇatvaṃ vyavasthitam // 58 // 同様に、推理と似て非なる推理とには、そのままの対象をもつものではないけれども、結果を設けることに従って [前者だけが] プラマーナであると確定される。

正しい推理 = 結果を設けることに関し欺かないこと = プラマーナ = 勝義

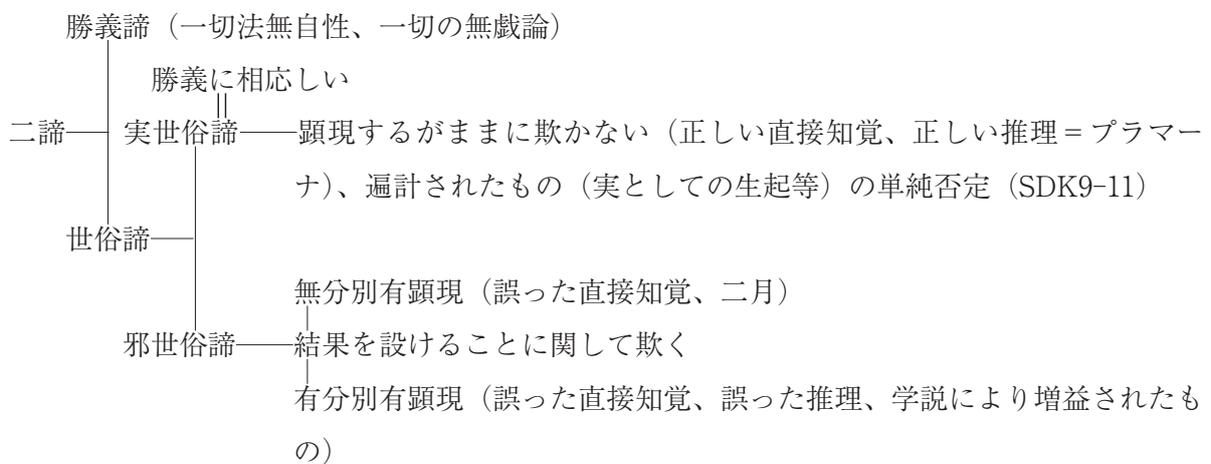
したがって、直接知覚のみならず三条件を具えた立証因によって導かれた推理知すなわちプラマーナを勝義と位置付けているのはダルマキールティであると考えられる。それに対しジュニャーナガルバは、それを実世俗とする。このことは、次のシャーンタラクシタによる SDP18a5 *ad* SDK4 には「三条件を具えた立証因によってもたらされる知が勝義であるなら、ここに煙がある故に火があるという知識も勝義となろう」と難じている。この点からプラマーナを勝義とするか実世俗とするかの対立軸が知られ、このことが二諦の設定の根底にあると考えられる。さらに、この SDV *ad* SDK4d では、「顕現するがままのもの」すなわち見られたままの、直接知覚<sup>(1)</sup>されるものが実世俗 (Cf. SDK8) であることと、顕現するがままであっても誤った直接知覚 (例えば、二月) であるものとの区分を表している。SDV *ad* SDK5 においては、顕現するがままのもの、直接知覚されたものが実世俗であり、勝義は「何も見ないことが真理である」と『法集経』を教証として表される。

(2) 実世俗と邪世俗との区分の基準としての、プラマーナ論

SDV5b2-7 *ad* SDK8 (本稿 [2]) からは、実世俗諦とは顕現するがままに結果を設けるもの、事物 (vastu) のみ、諸の因と縁とにより生起したもの、知に顕現するものであり、事物のものとは自相をもつもの<sup>(2)</sup>、すなわち直接知覚の対象ということであるから、実世俗とは構想された対象を離れ顕現するがままの事物のみを対象とする 直接知覚を意味している。それに対し、邪世俗とは無分別ではあるが誤った直接知覚 (二月など)、さらに有分別な学説に依存し増益されたものを指示している<sup>(3)</sup>。

SDV *ad* SDK12 (本稿 [4]) においては、水と蜃気楼との具体例により<sup>(4)</sup>、顕現する点では等しいが水であるとの判断から実際に水が獲得される場合と蜃気楼を誤って水と判断することからは実際に水は獲得されない場合とに関して、前者は結果を設けることに関して欺くことはなく、他方、後者は結果を設けることに関して欺くものである。これは、概念知 (共相) から欺かない結果をもたらす正しい推理を実世俗とするに対し、結果を設けることに関して欺く誤った推理を邪世俗とするものである。したがって、SDK12 では実世俗と邪世俗との峻別の基準は正しい推理と誤った推理とにある<sup>(5)</sup>。以上 SDV *ad* SDK8, 12 から 実世俗とは正しい直接

知覚と正しい推理とであり、邪世俗とは無分別ではあるが誤った直接知覚と誤った推理知と有分別な学説などにより増益されたものである。つまりプラマーナであるか否かが実世俗と邪世俗との峻別の基準である。したがって、正しい直接知覚と正しい推理知とは、共にプラマーナであるから実世俗は一種であり、増益されたものを含め誤った推理知（有分別有顕現）と二月を見ることのように誤った直接知覚（無分別有顕現）とであり、邪世俗は有分別と無分別との二種である。この峻別の基準は、シャーンタラクシタ、カマラシーラ、ハリバドラへと継承される。したがって、後期中観派とは、ダルマキールティのプラマーナ論を実世俗と邪世俗との峻別の基準として採用する学派であるといえよう。以上を図示しておく。



ジュニャーナガルバにとり結果を設けることが、何故、勝義ではなく実世俗であるかは、直接知覚に関しては、SDV *ad* SDK13, AS13-1~13-4 において有形象、無形象、異形象、自己認識の点から認識に関する因果関係の成立しないことを論じ、推理知に関しては SDV *ad* SDK14 でアポーハ論に基づく因果論の検証を通じ論じられている<sup>(6)</sup>。それは、ダルマキールティによる因果論すなわち結果を設けることが勝義であるとする事への批判的吟味である。

(3) SDV *ad* SDK9-11 (本稿 [3]) における遍計されたものの否定に関する勝義、世俗の論議 <1>：遍計されたものは必ず邪である (SDK8d) から、遍計された実としての生起などの否定は事物と異なり顕現せず邪世俗であるとの反論に対し、その否定は事物の自性と無区別である故、顕現し実世俗であるとする。続いて、シャーンタラクシタは (本稿 [3-1])、この否定と事物の自性と無区別に関し「壺を欠いた地面の顕現」により解説し、ダルマキールティによる無知覚 (anupalabdhi) の理論を活用している。さらに実としての生起などの否定は真実としての勝義 (無が確定される相対否定) であると主張する瑜伽行派に対して、ジュニャーナガルバは SDK9ab で、その否定は勝義 (真実) に相応しい勝義であると答弁し、その否定は単なる否定としての単純否定とみなしている。SDK9cd 「否定対象が存在ではないから真実として否定は存在しない」と論じる。SDV *ad* SDK10, 11 においては真実として実としての生

起などの否定はなくとも、生起が存在することにはならないとし、また真実は無戯論であることを『維摩経』の不二の法門、離言の教説により決着させる。さらに遍計された所取能取を欠いた依他起性を真実と見るディグナーガを退けている。後の [5-1] では否定対象の無なるものの否定を論じる龍樹の『ヴァイダルヤプラカラナ』15を指示すると思われるものを根拠に SDK9cd を再出しその否定は世俗であると導く。

(4) SDV *ad* SDK17-19 (本稿 [5]) における遍計されたものの否定の推論に関する勝義、世俗の論議 (2) : 異なった学説に立つ者の間では、ダルミン、ダルマ、喩例に関して共通性をもたない。その場合、[分別] 知に顕現するダルミン、ダルマ、喩例によって推理を遂行し、[分別] 知に顕現するものは真実として有であるか無であるかと考察する (SDK18, 19)。これは、プラダーナなど仏教徒の承認しないものを推理により否定する方法としてダルマキールティにより PVSV p.105, 24-26, p.106, 4-5 *ad* PVI 205-206、において論じられるものである。すなわち、習気による分別知における顕現をダルミンとし、存在に根拠をもたないことを所証とし、そのように認識されないことを能証とすることによって、否定が証明されることを表明する。さらにジュニャーナガルバは、この遍計されたものを否定する推論は誰によっても否定されないが、ある者は勝義性とし、他の者達は真実そのものとする。SDP によれば、前者が中観派、後者が瑜伽行派であり、後者は三条件を具えた因による推論を勝義であるとするのである。この勝義性 (世俗) と勝義とが別ではないことを『二万五千頌般若』を典拠としてジュニャーナガルバは表している。しかし修道論上の階位としては瑜伽行派の見地よりも中観派の見地を上位に位置付ける (Cf. SDV *ad* SDK32)。上のダルマキールティにより考案された遍計されたものを否定する推論は、シャーンタラクシタの VNV<sup>(7)</sup>, MAV p.236, 4-11 *ad* MAK71-72 でも取り上げられ、またカマラシーラの MĀ、ハリバドラの AAA でも活用され所依不成性 (āśrayāsiddhatā) でないことの根拠とされる<sup>(8)</sup>。

また遍計されたものの否定を瑜伽行派 (ダルマキールティ) が勝義とするのに対して中観派 (ジュニャーナガルバ) が実世俗とし対峙することは次のカマラシーラによる注釈からも明らかであろう。

MAP pp.235, 13-237, 1 *ad* MAK72, Cf. SDK9cd [ダルマキールティによる主張] 勝義として生起などは無であるけれども、他者 (異教徒) の言明である故、[分別] 知としての生起などを設けて、それらを否定することによって不生などが確定される。[答論] 分別知に依存するとしても (MAK72c) 云々という。不生などは分別知に依存していると認めるなら、世俗であるが勝義ではない。分別知に関しては世俗の性質があるから、また分別知の領域も増益された性質をもつからどうして勝義であろうか。[この後、PVSV 分別知における顕現が続く]

(5) トリラトナダーサの依他起性、自己認識説とジュニャーナガルバによる論難 :

SDV *ad* SDK5 において『法集経』に説かれる「何も見ないことが真理を見ることであ

る」<sup>(9)</sup>に関し、見ないこととは遍計されたものに限定され、すなわち遍計されたものである所取能取を離れた依他起性が真実であるとし、それは自己認識により証明されるとする見解が SDV *ad* SDK6 で、ジュニャーナガルバにより批判的に吟味されている<sup>(10)</sup>。さらに二取は無明によるとする見解も SDV *ad* SDK24 において吟味される。二取を遍計されたものとするのは、二取は無明によって起こることを意味するであろうから、それらは一連のものと考えられる。では、以上のことを表明するのは瑜伽行派の如何なる論師であろうか、それは、ディグナーガの『八千頌般若経』の注釈『般若経の要義』に対し注釈を著わしたトリラトナダーサであると考えられる<sup>(11)</sup>。彼の三性説に関する見解は次の三点に集約されよう。

- ① 所取能取を離れている知の自性が依他であり、自己認識 (ātmasaṃvedana, svasaṃvedana) のみとしてある。無二知 (advayañāna) であることは自己認識によって証明される。
- ② 無明によって所取能取の顕現としての青などがある。所取能取の顕現としての青などは無明という他に依っているから依他である。
- ③ 青などは勝義として無であるから知のみに過ぎない (無形象知識論)。

以上のトリラトナダーサによる所取能取としての顕現である青などの形象を離れた無二なる知すなわち無形象知は自己認識により証明されるという学説が SDV *ad* SDK6 に取り上げられ論難されていると考えられる。さらにまた、所取能取として顕現する青などの形象と無明との必然関係 (因果性と同一性) を認めるなら、形象は依他起性になると論難するものが、SDV *ad* SDK24 である。ジュニャーナガルバは遍計されたものの無の主張を批判的に吟味する点から所取能取を欠いた無二知を自己認識する知の实在を主張する者の見解を無形象知識論者 (nirākāravijñānavādin) のものとして取り上げ、この論者に対して、対象の形象 (viṣayākāra) を有する知がプラマーナであると『定義 (lakṣaṇa)』を作った人 (ディグナーガ) と『プラマーナヴァールティカ』を作った人 (ダルマキールティ) とは、また他の者 (汝、デーヴェンドラブッディ?) は何らかの仕方で説かなくてはならないという趣旨の批判を表している。それは対論者によれば、二を離れている自性をもつものを [自己] 認識し、二取の無を [自己認識により] 知ることになるが、それは不合理であるとするものである。なぜなら二取の無を認識するのは、無知覚 (anupalabdhi) という推理によってであって自己認識の直接知覚によってではないからであると考えられる。そもそも二を離れている自性をもつもの、すなわち依他起を自己認識によって証明する必要がある。このジュニャーナガルバによるトリラトナダーサへの論難が、シャーンタラクシタの MAV *ad* MAK60にも継承されていると考えられる。シャーンタラクシタは迷乱と形象との必然関係すなわち因果性と同一性とを認めれば、形象は依他起性ということになると形象虚偽論 (無外境無形象知) を論難している。この形象虚偽論者もトリラトナダーサと考えられ<sup>(12)</sup>、続いてダルマキールティの PV III. 355cd における、惑乱した人にとって砂漠においては、遠くにある小さなものが大きく見られるということ、さらにシュバグプタによる習気から知に青などの形象が生起するという見解が取り上げら

れ批判されている。そこに表される三者の見解に共通する点は、形象の生起は認識者の無明、迷乱、習気による故、形象は真実ではなく虚偽である、すなわち無形象知ということである。シュバグプタの見解とされるものをカマラシーラは MAP (pp.159, 1-161, 3) で解説を施し、ハリバドラはそれを引用している (AAA pp.631, 25-632, 8) <sup>(13)</sup>。シャーンタラクシタらは挙げて三者の無形象知 (形象虚偽論) に対し、虚偽な形象は迷乱などに依存する限り遍計ではなく依他になると論難している。

以上の根拠としてトリラトナダーサの主張を訳出しておく。

(PSKV, P356a7-b2, D311b4-6) というのは、知ることの自性は [形象との] 相互依存によって構想されたものではない。自己の因からそのように (知ることが) 生起するからである (Cf. SDV 4b5 gal te śes pa'i no bo ñid ni 'di 'dra ste / rañ gi rgyu las skyes siñ des de ltar 'gyur ro she na /)。上で述べられた通り所取能取性を離れているから、自己認識 (svasaṃvedana) のみとしてあるそ (知) の自性自体に関してそう (所取能取性を離れていると) いわれる。[無二なる] 知の自性も自己認識の直接知覚 (svasaṃvedanapratyakṣa) によって成立する。すべての者が真理を見ることはない。なぜなら、部分をもたないから無二が知の自性である。[凡夫は] 所取能取性に関する迷乱した (bhrānta) 種子を必然的に伴っているから、無二なる知の自性である顕われが起こらない (Cf.MAK60ab)。そうであれば、無二なる自性をもつものが所取であっても、所取でないもの (遍計なる所取能取の二) と等しいのである。

(P355b4, D311a4) それらの青などは勝義として無であるから、知のみに過ぎない。

(P356a3-4, D311b1-2) そういう (誤りが無いという) こと故に、それ (二) も無となろう。

それを把握するという言葉によって顕現している知の自性をいうのではないが、かえって外界にある青などとして顕現しているものは [原子の積集として] 一と多として吟味に耐え得ない (dpyad mi bzod pa, Cf. MAV p.210, 18-19 ad MAK65-66) から真実ではない。

(P348a4-7, D305a2-4) そのうち、遍計されたもの (kalpita) というのは完全に清浄でない (aparīśuddha) [依他なる] 知に所取能取として区別されて顕現しているその青などに関していわれる (Cf.MAK60ab)。諸の凡夫によって遍計されたものだからである。依他というのは無二なる知に自性として存在しているのなら、[諸の凡夫にとっては、依他は] 無明によっているのであるから、二として顕現しているのである。それ (二として顕現しているもの) は無明という他によっているのであるから、依他といわれる (P348a6, D305a3-4 de ni ma rig pa'i gshan gyi dbaṅ yin pa'i phyir na gshen gyi dbaṅ shes brjod do //)。円成というのは、所取能取の形象を離れている知ということである。それは完全に成立している故に円成といわれる <sup>(14)</sup>。(P349a4-5, D305b7-306a1) [円成実性に関して] 無垢なる清浄も、言葉を対治する道は修習によって諸のヨーギンに無二なる知が生起することが無垢なる清浄である。無垢にして汚れを離れることによって清浄にして清らかという仕方によって [達成されるの] である。

## Ⅱ. 『二諦分別論』 和訳研究

[1] SDV4a2-7 ad SDK4 [プラマーナ勝義論、世俗論]

[ジュニャーナガルバの主張] 世俗と勝義との二諦を牟尼は説いておられることに関して (SDK3ab)、あれこれの經典にという言葉を補って理解しなくてはならない。顕現するままのものが世俗であり、他は別(勝義諦)である (SDK3cd)。勝義諦という意味である。牛飼いの妻などに至るまでの人が見ている通りに世俗的真理があるのであるが、正しいものとしてあるのではない。[世俗とは] 見ることと一致して事物としての対象を確定して把握するからである。見ることは二種である。有分別と無分別とである。

[ダルマキールティの主張] 道理に適ったもの(プラマーナ?)こそ勝義諦である。ni(こそ)という語は強調の意味である。勝義としての真理が勝義諦である。それは論理に付き従った真理という意味である。なぜなら、欺かない故、論理は勝義である (SDK4ab)<sup>(15)</sup>。論理(必然的關係、同一性と因果性)によって対象を確定することは欺くことがない。それ故、三条件を具えた立証因によって導かれた(推理)知は勝れたものでもあり、対象でもある故、勝義である<sup>(16)</sup>。それによって確定される(推理知の)対象も勝義である<sup>(17)</sup>。直接知覚などのようにといわれる。[推理知と直接知覚と(のプラマーナ)は欺かないから勝義であり、それは] 世俗(諦)ではない (SDK4b)。勝義は (SDV4a6) 世俗諦ではない。[諦という] 末尾の言葉を補って解釈するからである。

[中観派による反論] 何故に。

[ダルマキールティの主張] そのように、[世俗諦(共相)は] 欺かないものではないから (SDK4c)。それ(世俗、欺くもの)は、知の自体にあるもの(自相)のように道理として妥当しないからである。

<SDP18b1 [反論] 道理によって妥当しないなら、どうして諦(真理)であるのか>

[ジュニャーナガルバによる答論] 顕現するがままのもの(直接知覚)は[世俗の]真理である (SDK4d)。顕現するがままのもの(直接知覚)は世俗諦と言われる<sup>(18)</sup>。二月なども顕現するがままに他ならないとしても、世間の人々は、そのように(真理であると)は承認しない。それ故に、[二月などは] 邪世俗であるということは、後に [SDK12 で] 説明する。

[1-1] SDP18a1-b4 ad SDV4a2-7 ad SDK4

[ダルマキールティへの反論] 何故、論理を勝義というのであるか。

[ダルマキールティの主張] なぜなら、欺かない故、論理は勝義である (SDK4ab) と述べた。

[ダルマキールティへの反論] その欺かないこととは、どういうことであるのか。

[ダルマキールティの主張] 論理によって対象を確定することは欺くことがない。それ故、

三条件を具えた立証因によって導かれた知は勝れたものであり、対象でもある故、勝義である<sup>(19)</sup> (karmadhāraya としての勝義の解釈) と [ダルマキールティは] 述べる。(SDP18a3) 論理によってとは同一性 (tādātmya) と因果性 (tadutpatti) とを特徴とする必然的關係 (pratibandha) を具えた事物によってということである<sup>(20)</sup>。欺くことがないというのは、なぜなら結果が因に対して迷乱しないからである。[さもなければ] その結果ではないことになってしまうからである。自性も自性に関して迷乱しないであろう。その自性でないことになってしまうからである。勝れたものでもあるというのは欺かない (からか)、あるいは対象と必然關係にあるからである (karmadhāraya としての勝義の解釈)。直接知覚によって確定される対象は直接知覚と升とによって量られる穀物は升であるというように [正しい推理知と直接知覚とは欺かないから勝義である]。勝義 (道理) によって (SDP18a5) 確定される対象、すなわち不生なども勝義といわれる (tatpuruṣa としての勝義の解釈)<sup>(21)</sup>。

[答論] 三条件を具えた立証因によって導かれた知 (欺かない推理知) が勝義であるなら<sup>(22)</sup>、 そうであれば「ここに煙がある故に火がある」という知識も勝義となろう。そうであれば、それ (三条件を具えた立証因) によって確定される (自相を有する) 対象も勝義 (SDV4a5) となろう。 そう (三条件を具えた立証因による対象が勝義であるとは) 知られはしない。煙などは元来、不生である故に、無であるから、それ (三条件を具えた立証因) によって生起した知、あるいはそれ (三条件を具えた立証因による知) によって量られる対象が有であることに、どうしてなろうか。もし、見られたままの煙などの立証因によって火などの対象が成立する (SDP18a7) なら、そうであれば、承認されるから、それに過失はない。というのは、無を断じるものとして成立するその火など (三条件を具えた立証因による知によって量られる対象) は勝義に相応しいから勝義性として認められる<sup>(23)</sup>。勝義はあらゆる概念知の網を排除している特徴をもつからである<sup>(24)</sup>。

[反論] 偈 (SDK4b) (SDP18b1) の中で世俗とっていないであろうか、[自] 註 ('grel pa) で世俗諦と、何故いうのであるか。

[答論] [諦という] 末尾の言葉を補って解釈する。

[反論] [世俗諦が] 道理によって妥当しないなら、どうして真理であるのか。

[答論] 顕現するがままのもの (直接知覚) は [世俗の] 真理である (SDK4d) と [ジュニャーナガルバは] 述べた。

[反論] そうで (SDP18b2) あれば、壺などと二月などとは何の区別もなくなろう。

[答論] 二月なども云々と [ジュニャーナガルバは] 述べた。も (yañ) という言葉によって壺などだけではない [ことを表わす]。

[反論] 世間の人々は壺などと (SDP18b3) 二月などとに関して真実と非真実という言語習慣をどうやって設けるのであるか。

[答論] 無明によって盲目となった世間の人々は壺などのように二月などを真実であるとその

ようには承認しない (SDV4a7) ことによってである。それらの言葉によって勝義に相応しい (SDP18b4) 勝義であるものは、その起こり (bīja) だけを述べて詳細は後に分析する。[以下、固有な意味の勝義 (aparyāyaparamārtha) に関して説かれる。]

[2] SDV5b2-7 ad SDK8 [直接知覚を基準とする実世俗、邪世俗]

その世俗は実と邪との区別によって二種である。その場合、構想された対象を離れ、ただ事物のみのものに依存して生起したもの (直接知覚) が実世俗であると知られなくてはならない (8abc)。構想された対象とは、実としての生起などと知の顕現とプラダーナと物質元素との転変などであって、[構想されていないものである実世俗とは] それらを離れたものである。ただ事物のみのもの<sup>(25)</sup>というのは [直接知覚に] 顕現するがままに結果を設ける能力をもつもの (don byed nus pa, arthakriyāsāmarthya) であるからである [直接知覚の対象]。諸の因<sup>(26)</sup>と縁<sup>(27)</sup>とに依存して生起したもの (感官知) は実世俗諦であると知られなくてはならない。というのは、[賢者から] 凡夫に至るまでの知に<sup>(28)</sup> [賢者と凡夫との直接知覚に] 共通して (等しく) 因から [生起した]<sup>(29)</sup> その [賢者と凡夫とに共通した直接知覚として] 顕現しているものは実世俗として論理に適っている。[直接知覚としての] 知における顕現と等しいものとして事物は存在しているからである。実としての生起などは [直接知覚に自相として] 顕現しないものである。[直接知覚に顕現しないものというのは] どうして妥当するものであろうか、あるいは学説に依存して増益されただけのものに過ぎない。そうでなければ (対象として顕現するものなら) 論争はないことにまさしくなってしまうであろう。対論者と答論者との知に顕現する部分 (共通したもの) に関して論争することはなにもない (Cf. SDV6b7 ad SDK13 依存して生起するものであり、結果を設ける働きをするもの (don gyi bya ba byed pa)、ただ事物にすぎないものは私と汝とによって承認されている)。論争するならば、直接知覚 (pratyakṣa) (感官知) などによって拒斥されよう (直接知覚と推理などとに矛盾する)。遍計されたものは必ず邪である (SDK8d)。[学説により増益された] 実としての生起などは概念知 (kalpanā) の作り上げたものである。それは邪 (SDV5b7) 世俗諦である。ni (hi) というのは、強められた意味であるか、あるいは (遍計されたものということ) 順序が逆転していること [を意味] する。[邪は遍計されたものと読んではいけない。なぜなら、二月などは遍計されたものではないが、欺くから邪である (似現量)、無分別邪世俗]

[2-1] SDP23b1-24a7 ad SDK8

その世俗は実と邪との区別によって二種である。その場合、構想された対象を離れ、ただ事物のみのものに依存して生起したものが実世俗であると知られなくてはならない (SDK8abc) 云々と [ジュニャーナガルバは] 述べたのである。最初のなどという言葉によっては住 (gnas pa, sthiti) などが包括される。後 [のなどという言葉] によっては精神原理 (puruṣa)

(SDP23b3) の転変 (pariṇāma) などが含まれる。実としてというのは各々のものに結びつく。ただ事物のみのものを立証因とするものが結果を設ける能力をもつもの (don byed nus pa, arthakriyāsāmarthya) である<sup>(30)</sup>。これ (結果を設ける能力をもつもの) も [直接知覚に] 顕現するがままのものであるが、真実のままにあるのではない。諸の因と縁とに依存して生起したものは [直接知覚に] 顕現するがままであると言及されている<sup>(31)</sup>のである。諸因は共通しない (asādhāraṇa) 因 (byed rgyu, kāraṇa) [眼など] である。諸縁は共通する (sādhāraṇa) [色など] である。事実として吟味すれば、諸縁も因である。

[反論] 何故、これは実世俗諦であるのか。

[答論] というのは、凡夫に至るまでの [直接知覚としての] 知に [等しく因から顕現する] 限りの [その] 対象は [実世俗] と [ジュニャーナガルバは] (SDP23b5) 述べたのである。壺などの知に関して、その [直接知覚としての] 顕現は実世俗として論理に適っている (SDV5b4-5) と結びつく。

[反論] どのように顕現するのであるか。

[答論] 共通して (等しく) と [ジュニャーナガルバは] 述べた。

[反論] 誰と等しくであるのか。

[答論] 凡夫に至るまで (SDV5b4) と [ジュニャーナガルバは] 述べた。諸の賢者から凡夫に至るまでという意味である。それは次の通り、論書によって堅められた智を具えた人々 (賢者) にとっても、凡夫に顕現するがままである壺などの [直接知覚に] 顕現するものは実世俗諦である。論書などによって増益され [直接知覚に、感官知に] 顕現しない形象をもったものは邪世俗諦であるといわれよう。

[反論] どのような具合に顕現するのであるか。

[答論] [賢者と凡夫とに共通して] 因から [顕現するもの] (SDV5b4) と [ジュニャーナガルバは] 述べた。[因からというのは] 眼 (色、光、注意力) などの集合体 (tshogs pa, sāmagri) から [眼識 (感官知) が生起する] という意味である。顛倒して繰り返した習気 (SDP24a1) 成熟から<sup>(32)</sup>か、あるいは論書から起こった (増益された) ものではない (習気の成熟を因とすることや論書の中で構想されていることを除く) ということが [ジュニャーナガルバにより] 意図されている (bsams pa, abhipreta)。このことは、因によって色などが顕現すること [感官知] は世俗諦であるが、勝義諦ではないと説いている。

[反論] 何故に、これが実 (SDP24a2) 世俗諦であるのか。

[答論] [直接知覚としての] 知における顕現と等しいものとして事物が存在しているから (SDV5b5) と [ジュニャーナガルバは] 述べた。

[反論] そうであれば、実として生起することなども、まさに実に関する世俗諦とはならないのか。

[答論] 実としての生起などは [直接知覚に] 顕現しない (SDV5b5) と [ジュニャーナガル

バは] 述べた (SDP24a3)。

[反論] 顕現しないなら、どうして増益されたもの (邪世俗) であるのか。

[答論] [顕現しないものが] どうして妥当するものであろうか、あるいは学説に依存して増益されただけのものに過ぎない (SDV5b5) と [ジュニャーナガルバは] 述べた。どうして妥当するものであろうかというのは無始以来、顛倒して構想されたものによって、それは、そうである。(SDP24a4) そうでなければ、実としての生起などは [感官知に自相として] 顕現しよう。両者において論争はないことにまさしくなってしまうであろう。

[反論] 何故であるか。

[答論] 対論者と答論者との [直接知覚としての] 知に顕現する部分に関して論争することはなにもないと [ジュニャーナガルバは] 述べた。

[反論] そういった点に関して万が一、論争する。(SDP24a5)

[答論] 論争するなら、直接知覚などによって拒斥されようと [ジュニャーナガルバは] 述べた。などという要約によって推理などが含まれる。邪とは世俗であって遍計されたもの (SDK8d) としての事物ということを補わなくてはならない。これ (遍計されたもの) を説明するために実としての生起 (SDP24a6) などというものはと [ジュニャーナガルバは] 述べた。それ (遍計されたもの) は概念知 (kalpanā) の作り上げたものである (SDV5b6) ということが、このこと (実としての生起など) によって表されている。[概念知の作り上げたものは] 眼などが集合して (tshogs, 'tshogs pa) も [感官知 (indriyapratyakṣa) として] 顕現しない。そうであるので、それ (顕現しないもの) は邪世俗諦といわれる。ni というのは、強められた意味であるか、あるいは遍計されたもの (parikalpita) に他ならないということと (SDP24a7) 順序が逆転していること [を意味] する。

[3] SDV5b7-6b5 ad SDK9-11 [遍計されたものの否定に関する勝義、実世俗 <1>]

[反論] そう (遍計されたものは必ず邪、SDK8d) であれば、実としての生起などの否定 (不生) も、まさに邪世俗 (成立しないこと) となろう。それ (実としての生起などの否定) は、事物が [直接知覚として] 顕現するとしても、実としての生起などのように顕現しない。

[答論] そう (顕現しないの) ではない (Cf. SDP24b2)。それ (実としての生起などの否定) は事物の (SDV6a1) 自性 (顕現すること) と区別されないからである。[実としての生起などの否定は (SDP24b3) 事物の自性とは] 別のダルマ (顕現しない性質) であると遍計するなら [実としての生起などの否定は確定せず] 邪世俗ということにもなろう (Cf. SDK8d)。

[以下、瑜伽行派との論議]

というのは生起などの否定 (不生) も (yai) (SDK9a)

実としての生起などとして分別する事物を否定する立証因 (無知覚因) によって真実と相応しいから [真実の意義をもつ] と認め (SDK9b) (Cf. MAK70ab) 勝義 (真実に相応しい勝義)

であると我々は認める。他の者達（瑜伽行派）は〔実としての生起などの否定（不生）を〕真実に他ならない〔勝義〕<sup>(33)</sup>と把握する故、も（yañ）というのは包括する意味である。それ（実としての生起などの否定）も論理によって吟味すれば、世俗に他ならない<sup>(34)</sup>。

〔反論〕何故であるか。

〔答論〕否定対象が存在ではないから、真実として否定が（SDV6a3）存在しないこと〔単純否定〕は明らかである（SDK9cd）<sup>(35)</sup>。否定対象が存在しないなら、否定は起こらないから、無なる対象の否定は不合理だからである<sup>(36)</sup>。

〔ダルマキールティによる反論〕色などに関して生起などの分別の因を有したものの、すなわち対論者によって真実であると構想されている事物が否定対象に他ならない（→ [5] [5-1]）。

〔答論〕もし、そうであれば（SDV6a4）構想された自性を有するものの否定が構想されていない（真実である）ことに、どうしてだろうか（SDK10ab）<sup>(37)</sup>。否定対象が構想されたものとして把握されるなら、〔対比されるものの有が存在しないから〕否定も構想されたものとなる。石女の息子の浅黒さなどを否定することのように〔それが否定されたからといって、対比されるものである石女の息子が存在するわけではない〕。真実として否定が存在しなくとも〔単純否定であるから〕、生起などが存在することはない（不生である）。〔したがって、その否定は無効ではない。〕（SDV6a5）不生などが存在すれば、必ず否定が存在する（相対否定として対比されるものが肯定される）のではないから、また、〔否定がないなら、相対否定として〕それ（生起など）が存在するという論理はないからでもある〔否定のみの単純否定〕。したがって、これ（実としての生起などの否定、不生）は世俗である（SDK10c）。実としての生起はない云々。〔不生は〕真実の意義をもつが、真実ではない。（SDK10d）（Cf. AAApp.45, 8, 838, 18）真実の意義と続く。

〔反論〕何故であるか。

〔答論〕真実としては（SDV6a6）不二（生でもなく、不生でもない）である（SDK11a）。

「まさしくそれ故に、それは空でもなく<sup>(38)</sup>、不空でもない<sup>(39)</sup>、有でもなく無でもない、生でもなく、不生でもない、とそのことなどを世尊は説かれた。（AŚ11-1）」<sup>(40)</sup>中間偈

〔反論〕それは何故であるか。

〔答論〕それ（真実）は戯論のないものである。（SDK11b）<sup>(41)</sup>真実はあらゆる分別の網を離れたものである。まさしくそれ（SDV6a7）故に、文殊師利が真実について問うたところ、勝者の息子は語らないでいた。

『維摩経』に、「それから文殊師利はリッチャヴィ族の維摩に次のことをいった。善男子よ、我々はそれぞれの説を述べ終わった。汝も不二（SDV6b1）の法門を説くことに関して弁明されよ。リッチャヴィ族の維摩は何も語らなかつた。それから文殊師利はリッチャヴィ族の維摩に対して素晴らしいと称讃した。善男子よ、文字（akṣara）も音声（ruta）も表象（vijñapti）も起こら（SDV6b2）ないことが、諸菩薩にとって不二の門に入ることです。素晴らしい、素

晴らしい」と説かれたように<sup>(42)</sup>。

「二（所取能取）を欠いた事物である依他起であるものが真実（円成実）であるならば、[不二の法門（真実）に関して] 問われたとき、何故に、その勝利者の息子（維摩）は語らないでおられたのか。（AŚ11-2）」「言語契約に（SDV6b3）通じ、論理に通じている人々は、何としても自らの考えを述べるのである。したがって、語らないのは不合理である（無言の立場を取ることにはできない）。（AŚ11-3）」「そうでなければ（語るなら）、諸の言葉には自相の極み（構想されたもの、言葉を離れていること）がある。[そうであれば、語ることに正しいことなら] 論理学者（rigs pa smra ba, nyāyavādin）（SDP26a7 ディグナーガなど）が述べたことが、どうして論理に適っているのか、明瞭に述べなさい。（AŚ11-4）」「それ（真理）に関して語る（SDV6b4）べきことは、僅かといえども何もないから、それ故に [維摩は] 問われても、意味を語らないことによって詳細に説いているのである。（AŚ11-5）」[以上は] 中間偈である。諸法に関して真理を観察することに止まっているその菩薩は縁起以外の法（構想されたもの）は微塵すらも正しいとは見ないというこの（『法集経』の言葉）に矛盾はない。真理が述べられているからである。

[3-1] SDP24a7-26b7 *ad* SDK9-11

（SDP24a7）[反論] そう（遍計されたものは必ず邪である SDK8d）であれば、[遍計されたものではない] 二月などは邪世俗諦であることにならない。

[答論] [我々の主張に] 誤りはない。その場合は対論者にとっての事物の自性を排除することを主眼とするからである。

[反論] 実としての生起などの否定（不生）も（SDV5b7）、顕現する（SDP24b1）仕方ではないから、顕現しない実としての生起などのように、まさに<sup>(43)</sup>邪世俗となろう（SDV5b7）。

[答論] 何故に顕現しないのか。

[反論] それ（実としての生起などの否定、不生）は [事物が顕現するなら、実としての生起などのように顕現しない（SDV5b7）] と述べた。実としての生起などの否定（不生）がである。事物である壺などが [直接知覚として] 顕現するなら、[実としての生起などの否定（不生）は] 顕現しないと結びつく。[答論] 何と等しいのか。

[反論]（SDP24b2）実としての生起などのように [顕現しない点で等しい]。

[答論] そう（顕現しないの）ではない（SDV5b7）というのは顕現しないということに結びつく。二つの否定（顕現しないことはない）によって顕現するに他ならないことを表している。

[反論] 何故、顕現するのか。

[答論] [(宗) 実としての生起などの否定は顕現する。] [(因) 実としての生起などの否定は] 事物の自性と区別されないから（SDV5b7-6a1）と [ジュニャーナガルバは] 述べた。[(喩)] 事物のように。例えば、壺（SDP24b3）などを欠いているものは、それを欠いている場所が

顕現するなら、[壺を欠いていることと壺を欠いた場所とは] 区別されないから [壺を欠いていることは] 顕現する。これ (実としての生起などの否定) も、それ (壺を欠いていること) と等しいという意味である。[実としての] 生起 (skye ba) などは [事物の自性と] 別のダルマであると分別する場合、事物の自性と無区別であることは成立しないと万が一、そのように言うことを懸念して、[実としての生起などの否定を事物の自性と] 別のダルマ (顕現しない性質) であると遍計しようものなら (SDV6a1) と [ジュニャーナガルバは] 述べた。ni (hi) というのは強める意味である。[実としての生起などの否定は確定せず] 邪世俗ということにもなろう (SDV6a1) というのは、この場合も邪世俗に他ならないと強める意味であることが (SDP24b5) 付き従う。別の考えの者 (中観派ジュニャーナガルバ自身) においては実世俗であるといわれるから、も (yañ) (SDK9a) と [ジュニャーナガルバは] 述べた。[以下、瑜伽行派との論議]

[反論] 何故、そうであるのか。[答論] 以下の理由からである。生起などの否定 (不生) も (SDK9a)、我々 (中観派ジュニャーナガルバ自身) は [勝義に相応しいから] 勝義であると認めるということと結びつく。

[反論] どうしてであるか。

[答論] 真実に (SDP24b6) 相応しいからである。 (SDK9b) と [ジュニャーナガルバは] 述べた<sup>(44)</sup>。

[反論] どうして、まさしく真実に相応しいのであるか。

[答論] [習気の成熟による概念知における顕現をダルミンとし] 実としての生起などと分別する事物を否定する立証因によって (SDV6a1-2) と [ジュニャーナガルバは] 述べた。他の人々とは 瑜伽行派によって生起などの否定 (不生) は、まさしく真実として勝義であると把握される故、yañ (SDK9a) というのは包括を意味する。

[瑜伽行派による反論] 論理を述べる者<sup>(45)</sup>も、何故、そう認めないのか。

[答論] 生起などの否定は 世俗 (Cf. MAV p.236 (2)) に他ならないからである [顕現するが、自相ではない。Cf. PVSV pp.105, 24-106, 8]。

[反論] 何故であるか。

[答論] 道理によって吟味すれば、と [ジュニャーナガルバは] 述べた。

[反論] 何故、世俗に他ならないのであるか。 (SDP25a1)

[答論] 否定対象が存在しない故に、真実として否定は存在しないことは明らかである (SDK9cd) と [ジュニャーナガルバは] 述べた。それを説き示すために、否定対象が存在しないなら、否定は起こらないから (SDV6a3) と [ジュニャーナガルバは] 述べた。

[反論] 何故、否定対象が無なら、否定は起こらないのであるか。

[答論] 無なる対象の否定 (SDP25a2) は不合理だから<sup>(46)</sup> と [ジュニャーナガルバは] 述べた。対象が存在しなければ、否定は妥当しないことが真理であるなら、この場合、[構想された]

対象は存在している。

[反論] 色などに関して生起などと分別する因を有したもの、すなわち対論者によって真実であると構想された事物が否定対象に他ならない (SDV6a3)。(SDP25a3)

[答論] これは以下の通り知られなくてはならない。というのは、[ダルマキールティが無知覚の理論によって] 別なもの(大地)によって (apareṇa) 壺などの無を証明するなら、その場合、分別の因を有した事物(実としての生起など)を否定することによって証明する。[その際] 別なもの(不生に対比される有)は不合理であるからである。このことが、もしそうであれば (SDV6a3)、構想された自性の否定が構想されていないことに、どうして (SDP25a4) だろうか (SDK10ab) ということによって [否定が真実であることを] 否定する。どうして、[構想されていないことに] だろうかということによって、[真実であることは] あり得ないし [否定は] 構想されたものに他ならない [単純否定] という意味である。

[反論] それは、何故か。

[答論] 否定対象が構想されたものとして把握されるなら、否定も構想されたものとなる (SDV6a4) と [ジュニャーナガルバは] 述べた。

[反論] 何と等しいのか。

[答論] 石女の息子の浅黒 (SDP25a5) さなどを否定することのように (SDV6a4) と [ジュニャーナガルバは] 述べた。もし、生起などの否定が真実としてないなら、生起などが存在しようとする万が一、いうであろうことを懸念して真実として否定が存在しなくとも [単純否定]、生起などが存在することはない (SDV6a4) と [ジュニャーナガルバは] 述べた。

[反論] それは、何故か。

[答論] (SDP25a6) 不生などが存在すれば、必ず [生起などの] 否定が存在する (対比されるものの有がある) のではない (単に不生のみである) から (SDV6a4-5) と [ジュニャーナガルバは] 述べた。不生などであれば必ず否定すなわち生起などの否定がある(否定は真実である)のではないからである。否定がないからといって生起などの否定が排除されようか(対比されるものの生起があることになろうか)。不生などが排除されるとしても、何故 (SDP25a7) 生起などがあることになろうか。[単なる] 不生などがある場合に、生起などの否定はありはしない [対比されるもの有はない] が、かえって、不生などの自性(不生のみ)として存在する。あるものによって生起などの無(不生)が確定される [相対否定] なら、生起などの否定も存在し、それ(生起などの否定)が (SDP25b1) 無なら、[対比されるものの] 生起などが有となるという言葉によって、この(否定は真実であるという)見解は [有と無との] 対立 (viruddha) でもある。そう(生起などの否定が真実すなわち相対否定)であれば、[石女の息子などの浅黒さが否定されるに対し] 石女の息子なども存在することになってしまうであろう、[と] 補足されなくてはならないから、[否定が真実として存在しないなら] それ(生起)が存在するという論理はないからでもある (SDV6a5) と [ジュニャーナガルバは] 述べた。それ

が存在するというのは生起 (SDP25b2) などが存在することであり、[それは] 不合理であるから。どうして、不合理であるかは後で述べられなくてはならない。そのように、意義を証明して結論を示すために、したがって、これ (実としての生起の否定) は世俗である (SDK10c)。実としての生起はない云々。真実の意義はあるが、真実ではない (SDK10d)。真実の意義と続くと [ジュニャーナガルバは] 述べた。

[反論] 何故に真実ではないのか。

[答論] それ故に真実としては不二 (生でもなく不生でもない) である (SDK11a) と [ジュニャーナガルバは] 述べた。二とは生起などと不生などである。この意義は經典と結びつくからである。まさしくそれ故に、それは、空 (SDP25b4) でもなく不空でもない、有でもなく無でもない、生でもなく不生でもない、とそのことなどを世尊は説かれた (SDV6a6, AŚ11-1) と [ジュニャーナガルバは] 述べた<sup>(47)</sup>。空でないというのは、真実としては否定対象が存在しない故に、否定もないことが明らかである (Cf. SDK9cd) からである。不空でもないなどは多によって (SDP25b5) 一なる事物は設けられない云々 (Cf. SDK14) によって否定されるからである。

[反論] 何故、真実としては無二であるのか。

[答論] それは戯論のないものである (SDK11b)。と [ジュニャーナガルバは] 述べた。真実 (SDV6a6) ということを補いなさい。それは真実であるということはあらゆる分別の網を離れたものである (SDV6a6) ということによって説明される。それ故に、(SDP25b6) ここでは戯論とは分別の網であると言われる。あるいは戯論は言語の働きである。それも分別の網によって引き起こされたものである。それ故に引き起こすものがなければ、引き起こされる戯論もないと言われる。そのように言語の領域を超える (SDP25b7) ことが真実であるから、文殊が真実について問うたとき、勝利者の息子は語らないでいた (SDV6a7) と述べ、理解し易い。ある法門に関して生起と不生起などのその二のないことが不二である。それは不二でもあって十力と無所畏 (SDP26a1) などの諸法門でもある。それは、それらの知識を生起する門であるから、それを説くという言葉が結びつく (rnam par sbyar)。不二に入ることが何も語らないことである。このことによって [不二に] 入るからである。

[反論] その不二とは何であるのか。

[答論] あることに関して文字も言葉も表象も起こらない (SDP26a2) こと (SDV6b1-2『維摩経』) ということであって、文字とは字である。言葉とは文字である。表象とはことばである。対象を表象するからである。それ故に、それ自体が対象を理解させる。別なもの (言葉を離れたもの) は [理解させ] ない。これはそれぞれの言葉に分けたものである。形象がそのように (言葉によって) あり得る。その言葉は文字を前提とするものでもあって、言葉でもある故、文字の言葉である。(SDP26a3) 表象はその (文字と言葉との) 二を前提とするものでもあって、表象でもある。それ故に、文字の言葉の表象である。そのように真実であると理解さ

れなくてはならない。もし、二を欠いた依他起性であるそれが真実であると把握するなら、そのとき、それ（無二なる依他起性が真実であること）は不合理であって、それ故、二を欠いた事物である依他起（SDP26a4）であるものが真実であるならば、[真実に関して] 問われたとき、何故にその勝者の息子（維摩）は語らないでおられたのか（SDV6b2, AŚ11-2）と [ジュニャーナガルバは] 述べた。二は所取能取である。別の因と縁によって働き起こされる故、依他起性である。何故に、何も語らないことが不合理であるのかと [対論者が] 言ったことに関して、言語契約に通じ道理に通じている人々は何（SDP26a5）としても自らの知識を述べるのである。したがって、語らないのは不合理である（SDV6b2-3, AŚ11-3）と [ジュニャーナガルバは] 述べた。自らの知識を述べることは、どうしても世俗として述べるということと結びつく。

[反論] 誰らによってであるか。

[答論] 言語契約に通じた者達と述べた。[そういった] 人々によってである。

[反論] どういう人々によってであるか。

[答論] 論理に通じた人々（yuktijña）によってである。理解（SDP26a6）させることに関して学者達によってである。残りは理解し易い文章（brda phrad）である故に解説することはない。

[反論] 世俗の表現によっても語り得ないのか。もし、そうでなければ（語り得るなら）（SDV6b3, AŚ11-4a）、世俗の表現によっても語り得ないとき、自相の究み（AŚ11-4b）によって語られるものは、何にとってであるか。

[答論] 諸の言葉には [である]（SDV6b3, AŚ11-4a）。

[反論] 誰らによってであるか。

[答論] 論理学者（AŚ11-4c）（SDP26a7）達（rigs pa smra ba dag）によって、すなわちディグナーガ先生などによってである。それ（二を欠いた依他起が真実であること）が、どうして論理に適っているのか、明瞭に述べなさい（AŚ11-4d）。

[反論] 自性として語り得ない、それ故、[維摩は] 何もいわなかった。

[答論] もし、そう（自性として語り得ないの）であれば、我々はそれぞれの説を述べ終わった<sup>(48)</sup>（SDV6a7）という彼（文殊師利）らによって述べられたことも、どうして妥当でしょうか。

[反論] 彼（文殊師利）らによって（SDP26b1）一般的な自性として増益することによって述べられたのである。

[答論] そうであれば、聖維摩も同様に、何故、[一般的な自性によって] 語らないのであるか。如何なる根拠によって何も語らないであろうか。まさしくその故に、その勝義に関して語るべきことは僅かといえども云々（SDV6b3-4, AŚ11-5ab）という言語表現のみも何もない（AŚ11-5b）から、知（SDP26b2）の対象と有と真理と勝義云々というそれらの言明の止まるものも、そこには存在しない。作用（jug pa, pravṛtti）の根拠がないからである。

[反論] そうであるなら、それに関して (SDV6b3, AŚ11-5a) という言葉によって勝義がいわれなくてはならないとして、語るべきことは僅かといえども何もない (AŚ11-5b) というのは (SDP26b3) どうしてであるか。

[答論] それには誤りは存在しない。愚かな知を具えた他の者達が、それに関して述べられるべきことの僅かがあるという。そのように述べるべきではないと我々はそのこと (勝義に関して述べるべきことが僅かにあるということ) を否定するが、我々はそれに関して (AŚ11-5a) という言葉によって、あるいは他によって陳述している (abhidhāna) のではない。ただ対論者の分別を排除すること (vyavaccheda) のみを行うに過ぎない。僅かといえども (AŚ11-5b) という表現の語句において捨て去ることを表現することが主眼である。こそ (AŚ11-5a) というのは強調のためである。それ故に問われても意味を語らないことによって詳細に説いている (SDV6b4, AŚ11-5cd)。も (AŚ11-5c) というのは強調の意味である。(SDP26b5) 問うだけ、あるいは留まるだけ、あるいは詳細に説いているだけである。詳細に説いている (AŚ11-5d) という言葉は一般的な自性によって、あるいは特殊な自性によって、あるいは区分された自性によって語り得ないのである。

[反論] 勝義は縁起と別ではないのか。そうであれば經典の言葉 (SDP26b6) と矛盾しよう。

[答論] それ故、諸法に関して真理を観察することに止まっているその菩薩は (SDV6b4) ということを [ジュニャーナガルバは] 知っている。観察するというのは見ることである。諸法を不生などの諸形象によって見るのである。それぞれ (の菩薩) において [見ることが] 存在する故、法の (SDP26b7) 観察をもつのである。あるいはその仕方をもつのである。この『経』 (法集経) の言葉 (見ない) に矛盾はない (SDV6b4)。

[反論] 何故か。[答論] 法と述べているから (SDV6b5) と [ジュニャーナガルバは] いった。] 勝義としては法も存在しない。法でないものも存在しない。

#### [4] SDV6b5-7 ad SDK12 [推理を基準とする実世俗、邪世俗]

さらに、また世俗は〈SDP27a1 別の〉二種 (正しい推理知と誤った推理知) であると次の通り言われる。顕現することにおいて相似しているけれども、結果を設け得る、設け得ないから実と邪という点で世俗は区別される (SDK12)。明瞭な形象の顕現をもつ知という点で相似しているけれども<sup>(49)</sup> 顕現通りに結果を設けることに関して欺くことと欺かないことを確定してから<sup>(50)</sup>、水 [であるとの判断から実際に水を獲得すること] などと蜃気楼<sup>(51)</sup> [を誤って水と判断したことからは実際に水は獲得されないこと、] などとは、世間の人々によって [前者は判断通りに結果を設けることに関して欺かないから] 実 [世俗] であると、また [後者は判断通りに結果を設けることに関して欺くから] 邪 [世俗] であると知られる<sup>(52)</sup>。実際には両者 (実と邪と) は無自性という点で全く同じ自性をもつものである。顕現するがままに 〈jig rten gyis ji ltar rtogs pa de bshin du (SDP27a5) 世間の人々によって知られるがままに〉 あるので

ある。結果を設けることに関して欺くこと（誤った推理）と欺かないこと（正しい推理）ということも、まさしく常識のままに〔確定する〕ようにである。それも無自性であるからである。

[4-1] SDP 26b7-27a7ad SDV12

さらに、また世俗は二種であると言われる（SDV6b5）ということによって区別して、まさしく知（SDP27a1）られるからに他ならない故に、別の二種としてと言われる。結果を設ける得るから、実という点で、〔結果を設け〕得ないから邪とという点で世俗は区別される（SDK12bcd）というのは数のままに（二種であると）対応する。説明は以下の通りである。

[反論] 知は何と相似しているのであるか。

[答論] 明瞭な形象の顕現をもつ点で相似しているけれどもということと結びつく。世間の人々によって実と邪であると知られる（SDV6b6）ということと結びつく。

[反論] 何がであるか。

[答論] 水〔であるとの判断から実際に水が獲得されること〕などと蜃気楼〔に対して誤って水と判断することからは実際に水は獲得されないこと〕などが（SDV6b6）である。次第の如くに結びつく。

[反論] どういうふうにして（SDP27a3）であるか。

[答論] 確定してから（SDV6b6）と〔ジュニャーナガルバは〕述べたのである。

[反論] 何をであるか。

[答論] 結果を設けることに関して欺くことと欺かないこととを（SDV6b6）と〔ジュニャーナガルバは〕述べたのである。このことも次第の如く結びつく。結果を設けることに関して欺くことと欺かないことを確定して（SDV6b6）というのは、どういふふうにしてかということに対して、対象を（SDP27a4）顕現するがままに（SDV6b7）と〔ジュニャーナガルバは〕述べたのである。

[反論] 実と邪との区別があるなら。そうであれば、（実と邪との）両者は無自性ではない。

[答論] 実際には両者は（SDV6b6）云々と〔ジュニャーナガルバは〕述べたのである。

[反論] どうして自性が等しいのであるか。

[答論] 無自性である点で（SDV6b6）と〔ジュニャーナガルバは〕述べた（SDP27a5）のである。

[反論] どうして実と邪とを区別するのであるか。

[答論] 顕現するがままにある（SDV6b7）と〔ジュニャーナガルバは〕述べたのである。世間の人々によって知られるままにあるという意味である。

[反論] 結果を設けることに関して欺くことと欺かないこと（SDV6b6）という因によって確定されるなら（SDP27a6）、それら（結果を設けることに関して、欺くことと欺かないことと）は真実（bden pa）であるのか、あるいは〔真実〕でないのか

[答論] 結果を設けることに関して欺くことと欺かないこととも常識のままにである (SDV6b7) と [ジュニャーナガルバは] 述べたのである。

[反論] 何故に。[答論] その結果を設けることも無自性であるから (SDV6b7) と [ジュニャーナガルバは] 述べたのである。二つの yan という語は実と邪とを区別して (SDP27a7) 示している。そうであれば、世俗は三種であるといわれる。実世俗は一種 [結果を設けることに関して欺かないもの、正しい直接知覚と正しい推理知との、すなわちプラマーナ] である。邪世俗に関しては二種である。分別を具えたもの (学説により増益されたもの、誤った推理知) と無分別 (二月、誤った直接知覚) とに区別されるからである。

[5] SDV9b4-10a4 *ad* SDK17-19 [遍計されたものの否定に関する勝義、実世俗 (2)]  
世俗の真如であるものが勝義としての見地である (SDK17ab)。

[反論] 何故か。

[答論] [世俗と勝義とは] 区別されないからである (SDK17c)。世俗と勝義との二はと補わなくてはならない。その論理も顕現するままとしてある (SDK17cd)。論理も顕現するがまますを自性とするものであるから世俗に他ならない。論理は別な仕方で起こるのではない。というのは、両方の論者の知に共通して顕現するものがあることに限って、それに依存してダルミンと (SDV9b6) ダルマなどを構築する (SDK18)。その際、推論が起こる時、別な (両者に共通したものがない) 場合とは起こらない。したがって、論理学者 (rigs pa smra ba, nyāya-vādin) 達 (中観派と事物を論じる者と) がそう述べる時、誰が否定しようか (SDK19)。推理と推理の対象というこの言語行為は、対論者と立論者との知の自体に顕現するダルミン、ダルマ、喩例として [両者に共通して] 確立されるが<sup>(53)</sup>、両者に全く成立していないダルミン、ダルマなどによって推理が起こることは妥当しないから、別な場合には (SDK19b) [推理は] 起こらない。異なった学説に立つ者達は、どのような場合にも知が共通性をもたないからである。そういった (両者に共通している概念知としての) ダルミンに基づく (SDV10a1) 者達が、そういった (概念知としての) 立証因こそによって、真実として有であるか無であるかと考察することは承認されなくてはならない<sup>(54)</sup>。したがって、論理家もそのように推論を起こすなら、誰が否定しようか (SDK19d)。このことは、[対論者と立論者とに] 等しく成立すると確定している故、このことに関してこの欺瞞は生じない。まさしくそれ故に、『経典 (二万五千頌般若経)』にも

スプーティよ、世間の人々の世俗は勝義と別ではありません。世間の人々の世俗の真如であるものこそが勝義の真如である<sup>(55)</sup>。

と (SDV10a3) 説かれる。あるいはまた生起などの否定 (不生) も、ある者は勝義性である (SDP37b5 中観派にとっては世俗 [単純否定]) と主張し、他の者達は真実そのものである (SDP37b4-5 瑜伽行派にとっては勝義 [相対否定]) と主張する (Cf. MAV p.236, 14-16 *ad*

MAK72)。そうであっても、『経典（二万五千頌般若）』のこの言葉は巧みに導かれたものに他ならない。というのは、一方にとって勝義であるものが、他方にとっては世俗である。一方にとって母と言われる人が、他方には妻と言われるように〔依存するものにより、呼び方は異なっても、同一人物である〕。

と〔龍樹先生によってSDP37b4〕説かれる。

[5-1] SDP36b5-37b5 *ad* SDK17-19

世俗性は勝義という言葉として述べられる。まさしくそれ故に、世俗 (SDK17a) 云々と〔ジュニャーナガルバは〕述べたのである。真如 (SDK17a) とは自性である。

[反論] 何故に、世俗と勝義との二は無区別であるのか。[答論] その論理 (SDK17c) 云々と〔ジュニャーナガルバは〕述べたのである。

そうであれば、論理も世俗に他ならない (SDK9b5)。

[反論] 何故に。

[答論] 顕現するがままを自性とするものだからである。

[反論] それ自体、何故に。

[答論] 論理は云々 (SDP36b7) と〔ジュニャーナガルバは〕述べたのである。

[反論] 何故に、論理は別の仕方で起こるのではないのか。

[答論] というのは云々と〔ジュニャーナガルバは〕述べたのである。このことを解説する。推理と推理の対象とが起こると結びつく。

[反論] どうしてか。

[答論] 対論者と立論者との両者 [の知の自体] に顕現するダルマが [起こる]。(SDP37a1)

[反論] 何にであるか。

[答論] 知の自体にである。

[反論] どのようにしてであるか。

[答論] ダルミン、ダルマ、喩例として確立されてある (SDV9b6-7)。それ以外の別な (対論者と立論者との知に顕現しない) 場合には起こらない (SDK19b, SDV9b7) と繋がる。

[反論] 何故にであるか。

[答論] 推理が起こることは妥当しないからである (SDV9b7)。

[反論] どうしてであるか。

[答論] 両者に全く成立していない [ダルミン、ダルマなど] によって (SDV9b7) である。

[反論] 何がであるか。

[答論] ダルミンとダルマなどがである。などということによって喩例が含まれる。

[反論] 何故、両者に全く成立していないのであるか。

[答論] ダルマとダルミンと喩例はどのような場合も知が共通性をもたないからである

(SDV9b7)。

[反論] 誰らの (SDP37a3) であるか。

[答論] 異なった学説に立つ者達のである。学説とは定説 (siddhānta) のことである。そういうわけでそういった [対論者と立論者との両者の分別] 知に顕現するダルミンに基づいて (SDV9b7-10a1) 事物を考察する人々が、[分別] 知に顕現するそういった立証因こそによって、この知に (SDP37a4) 顕現するものは真実として有であるか無であるか、事物に依存するものであるのか、あるいはそうでないのか (Cf PVSV P.106, 4-8 bhāvopādāno na veti) と考察することは承認されなくてはならない<sup>(56)</sup>。などということによっては喩例が含まれる。論理学者 (SDK19a) (rigs pa smra ba, nyāyavādin) とは中観派あるいは事物論者 (dños po smra ba)<sup>(57)</sup>である。知に顕現する部分 (共通点) は吟味しない限り (SDP37a5) 素晴らしいもの (実世俗) である故、他 (学派) にとっての生起などとして遍計所執を否定することを専らとする推論を起こすなら、誰が否定しようか (SDK19d)。断じるのは誰かということは誰も否定しないということを表している。この事物は等しく成立すると広く確定 (SDP37a6) している故 (SDV10a1-2)、非常に懸念する者がこのことに関して、この欺瞞 (rgya, jāla) は生じない。そのようにその論理も顕現するままにあるから、まさしくそれ故に『経典 (二万五千頌般若経)』<sup>(58)</sup>に

世間の人々の世俗は勝義と別ではありません。

と説かれる。

[反論] 不合理である。何故に、その二 (諦) は別ではないのか。

[答論] というのは、世間の人々の世俗の真如を自性とするものは顕現するままを自性とするものという意味である。それ自体が勝義の真如でもある。論理も顕現するままに世俗としてあるからである。まず、以下のように『経典』の (SDP37b1) 意味は、三条件を具えた因の特徴を持った [推理] 知は、勝義であると説かれている<sup>(59)</sup>。[その推理知に関して] 別のあり方 (世俗) も説かれている。あるいはまた (yañ na) 生起などの否定も (SDV10a3, Cf. SDK9a) [勝義である] ということに関して、また (yañ) という言葉は論理のみではない [生起などの否定も含む] ということである。ある者は (SDV10a3 勝義性 don dam pa ñid) と (SDP37b2) というのは勝義としてあらゆる戯論を離れていることに相応しいから (SDK9b, SDV6a2) 論理学者 (rigs pa smra ba) 達 (SDK19c) (中観派) は勝義性 (don dam pa ñid) であると主張する (SDV10a3)。他の者達 (瑜伽行派) によっては (SDV10a3) 不生などの否定は真実そのもの (yañ dag pa kho na) としての (SDV6a2) 勝義性 (don dam pa ñid) であると主張されるということと結びつく。瑜伽行派の見解では、事実 (SDP37b3) として空性が真実である<sup>(60)</sup>から。そうであっても (SDV10a3) というのは、そういった (真実そのものとしての) 勝義に依存するとしても [ということである]。『経典 (二万五千頌般若経)』<sup>(61)</sup>のこの言葉「世間の人々の世俗は勝義と別ではありません」は巧みに導かれたものである

(SDV10a3)。巧みに理解させるものである (SDP37b4)。その場合、生起などの否定も (Cf. SDK9a) [中観派にとって] 世俗を自性とするものに他ならないからである。このことは以前にも、否定対象が存在ではない故、真実としては否定が存在しないことは明らかである (SDK9cd) と証明し終えている。まさしく、その (存在しないものの否定は真実ではなく世俗である) ことが龍樹先生によって説かれている<sup>(62)</sup>。

一方の瑜伽行派にとって勝義 [相対否定] として (SDP37b5) 立てられる生起などの否定 (不生) は、他方にとってというのは中観派にとって世俗 [単純否定] である<sup>(63)</sup> (SDV10a3-4)

[反論] 全く同じものが、一方としては勝義であり、他方にとっては世俗である。

[答論] 依存するものの区別によってそれ (勝義あるいは世俗という主張) は誤謬をもたない。

### 結論

ダルマキールティのプラマーナ論を活用、批判した最初の論師であるジュニャーナガルバによる『二諦分別論』は、シャーンタラクシタらの後期中観派の先駆的な著作である。そこには、二諦分別の根幹として、ダルマキールティがプラマーナ論を勝義とするのに対しジュニャーナガルバは実世俗とするという対立軸がある。これは次の点に見られる。

1. 三条件を具えた立証因により導かれた推理知は欺かない故、勝義であるとするダルマキールティに対し、ジュニャーナガルバは実世俗とする。
2. 所取能取を欠いた依他起を真実とするディグナーガは、論理家である故、言葉によって真実を表現するが、勝義は無戯論であり、また『維摩経』の不二の法門を教証としてジュニャーナガルバは言葉を離れていることを以って真理とする。
3. 遍計されたものの否定、不生の論証に関し、ダルマキールティの無知覚 (anupalabdhi) の理論を活用し実世俗とする。また PVSV における分別知における顕現をダルミン、ダルマ、喩例とする方法を導入し否定は真実である、すなわち否定と対比されるものの有が肯定される (相対否定) とするに対し、ジュニャーナガルバは虚偽な顕現に基づく不生の知は、知と顕現とは別ではないから、その否定も虚偽であり実世俗とする。したがって否定と対立するものの有は起こらない (単純否定) とする。
4. SDK8 においてジュニャーナガルバは直接知覚としての顕現を実世俗とし、学説により増益されたものを邪世俗とする。SDK12 においては、水と蜃気楼とを具体例とし、水であるとの想定から欺かない結果として、水が獲得されることを実世俗とし、蜃気楼を水と想定し、水が獲得されず欺くことを邪世俗とする。これはダルマキールティの共相から欺かない結果が獲得されるか否かという推理論を活用するものである。SDK8 と SDK12 とは実世俗と邪世俗との峻別の基準としてダルマキールティのプラマーナ論を導入している。
5. SDK6, 24 では、トリラトナダーサの無明に基づく所取能取を欠いた無二知は自己認識さ

れるという無形象知識論が論難される。またシャーンタラクシタの MAK60 における、いわゆる形象虚偽論もトリラトナダーサのものと考えられ、形象は無明に基づくものである限り依他起性となると論難される。

〔略号〕

AAA: Haribhadra, *Abhisamayālaṃkārikā Prajñāpāramitāvyaḥyā* / AbK: Vasubandhu, *Abhidhama Kośabhāṣya* / LAS: *Laṅkāvatārasūtra* / MAK, MAV: Śāntarakṣita, *Madhyamakālaṃkārikā, -vṛtti*. MAP: Kamalaśīra, *MA-ṣaṅjikā* ed. by M. Ichigo (1985) / MĀ: Kamalaśīra, *Madhyamakāloka*. / NB: Dharmakīrti, *Nyāyabindu*. / PSK: Dignāga, *Prajñāpāramitāsaṃgrahakārikā*. P.No.5207. / PSKV: Triratnadāsa, *Prajñāpāramitāsaṃgrahakārikāvivaraṇa*. P.No.5208, D.No.3810. / PV: Dharmakīrti, *Pramānavārttika*. / PVSU: PV-*svavṛtti*. / SDK, SDV: Jñānagarbha, *Satyadvayavibhaṅga-kārikā*. D.No.3881, -*vṛtti*. D.No.3882., SDP: Śāntarakṣita, *SD-ṣaṅjikā*. D.No.3883. / VN: Dharmakīrti, *Vādanyāya*. ed. by S.D.Shastri, B.B.S.-8.Varanasi.1972., / VNV: Śāntarakṣita, *Vādanyāyavṛttivipaṅcitārtha*

〔参考文献〕

一郷正道 (1982) 瑜伽行中観派、講座大乘仏教 7 中観思想所収／太田心海 (1985) ダルマキールティ (法称) 著『正しい認識に関する評釈—自己推論章』および自註・和訳 (一) 第95偈～第106偈、佐賀龍谷短期大学紀要31号／桜部建 (1975) 『俱舍論の研究 界根品』／戸崎宏正 (1979) 仏教認識論の研究 上巻／松本史朗 (1979) Jñānagarbha の二諦説、佛教学第5号／服部正明 (1961) デイグナーガの般若経解釈、大阪府立大学紀要 (人文・社会科学) 9 / 森山清徹 (1992) *Madhyamakāloka* に引用される『般若経』—二諦説と無自性論証の典拠—、真野龍海博士頌寿記念論文集般若波羅蜜多論集所収／(1993) Jñānagarbha と Śāntarakṣita の自己認識批判—Śākyabuddhi の理論と三性説及び因果論—、佛教文化研究第38号／(平成4年) 後期中観派と形象眞実論・形象虚偽論—Śākyabuddhi, Prajñākaragupta, Kambala—、印度学仏教学研究41-1／(2000) カマラシーラの自立論証としての無自性論証とダルマキールティの推理論—*Madhyamakāloka* 和訳研究—、戸崎宏正博士古稀記念論文集『インド文化と論理』所収／(2011a) シャーンタラクシタの *Vādanyāyavṛttivipaṅcitārtha* とカマラシーラの無自性論証—ダルマキールティの『量評釈自注』(PVSU) を巡って—、佛教大学仏教学部論集第95号／(2011b) カマラシーラ、ハリバトラによる無自性論証としてのプラマナー論、佛教大学仏教学会『仏教学会紀要』第16号／(2013) 後期中観派の無自性論証における知の成立及び非実在の否定とダルマキールティの推理論、福原隆善先生古稀記念論集 佛法僧論集第一巻所収／(2019) ジュニャーナガルバによるダルマキールティのアポーハ論に基づく因果論への批判—後期中観思想の形成 (3) —、佛教大学仏教学部論集第103号

〔注〕

- (1) Cf. SDP44b4 ad SDK27b
- (2) Cf. PV III. 11a 共相は事物ではない
- (3) MĀ P191a5-6, D171a1-2 顕現とは、何ものかによって否定されれば退けられるものであって、眞実の自性によって遍充されるものでもない。虚偽なもの [例えば二月など] も顕現するからである。そうでなければ、あらゆる人々が眞実を見ることになる。
- (4) Cf. PVSU p.50, 2-6 ad PV I. 98, 99ab. ta eva bhāvās tadekārthakāriṇo 'nubhavadvāreṇa prakṛtyā vibhramaphalāyā vikalpavāsanāyā hetutvān nimittam / marīcikādiṣv api hi jalādibh-rāntes tāv evābhinnākāraparāmarśapratyayanimittānubhavajananau bhāvau kāraṇaṃ bhinnav

api / 一つの結果を設けるそれらの存在(自相)こそが、知覚によって本性として迷乱(判断知)を結果としてもつ分別による習気にとっての原因である(自相→習気→迷乱、判断知)から、因としてある。なぜなら、蜃気楼(陽炎)などに関する水などという迷乱にとっても、その両者(蜃気楼と水)は、[実際は]相違しているけれども、相違しない(相似した)形象をもった判断知(parāmarśa)の因である知覚[相似した形象をもった知覚→思慮]を生起するものであることにおいて、原因である。Cf. PVSV p.51, 5-7 ad PV I. 98, 99ab. maricikāyām jalajñānasyānyasya ca bhinnabhāvotpatter vibhramasya cāvīṣeṣe 'py abhimatārthakriyāyogyāyogyotpatter arthasamvādetarau / 蜃気楼を水と知ることと、別の[水を水と知る]こととは区別された存在(自相を有する個物)から生起すること及び迷乱であることとに区別はないけれども(Cf PV III 57c)、意図された結果を設けることに適合し得るか適合し得ないかということを生起するから対象との一致と不一致とがある。Cf. PVSV p.43, 2-7 ad PV I. 76, 森山(2018) pp.9-10諸の自相を有する個物を見ること→習気による迷乱(概念知、共相の顕現)→整合性の有無(欺く、欺かないこと、ex.水と蜃気楼、宝石の輝きと灯火の輝き PV III. 56-58) Cf. 戸崎(1979) pp.260-261fn. (139)

- (5) 迷乱に関して、Cf. PVSV p.49, 5-7 ad PV I. 1-97 bhrānter avastusamvāda iti cet / na / yathoktenaiva vyabhicārāt vitathapratibhāso hi bhrāntilakṣaṇam / tannāntariyakatayā tu samvādo na pratibhāsapekṣi / [反論] 迷乱には事物との一致はない。[答論] そうではない。まさしく上で述べたとおり[迷乱は宝石の光を宝石と把握する故]逸脱しているから、迷乱(bhrānti)の特徴は真実ではないものの顕現(vitathapratibhāsa)である。他方、一致はそれ(実在)との必然的關係(nāntariyakatā)[因果関係、理解させるものと理解されるものとの必然關係svabhāvapratibandha, gamyagamakabhāva NBT2.21, 3.17]によってであるが、顕現に依存してのことではない。Cf. MAK60, PV III. 355, MĀ P259b7-260a1, D232b6-233a2 [反論] 世俗はプラマーナであるのか、あるいはプラマーナでないのであるか。もし、プラマーナであるなら、どうして世俗であるのか(勝義ではないか)、もし、プラマーナでないなら、どうしてこれ(世俗)によって無我が立証されようか。[答論] その詰問も不合理である。というのは、推理知が一般的な虚偽な形象を把握する点で、世俗を本性とするものに他ならなくとも、願っている結果を設けること(arthakriyā)を獲得させるから、プラマーナであると認められる(Cf. PV in 1)。
- (6) 森山(2019) pp.1-27, SDK13 に関して pp.18-20
- (7) 森山(2011a) pp.36-40
- (8) 森山(2013) pp. (82)-(84)、及び本稿注(53)
- (9) Cf. MĀ P183b7-8, D168b4-5 では「空」に関する論争の文脈で引用され、BhK I p.212 でも無二知(advayajñāna)に対して実在とする執着(vastutvābhiniveśa)を捨てるという文脈で引用されている。
- (10) 森山(1993)
- (11) 服部(1961)によれば、ディグナーガとトリラトナダーサとは、互いのテキストに注釈を著わし合っているから同時代人と見られる。
- (12) 後期中観派が取り上げる、いわゆる形象虚偽論者(無形象知識論者)としてチベット宗義書に関する研究成果を受け、かつてカンバラを想定したこともあったが、カンバラがシャーンタラクシタなどに先行する論師であると確定し得るわけではなく、また論議の内容のより一致する点から、ジュニャーナガルバやシャーンタラクシタが論難する見解を有する瑜伽行派の論師とはディグナーガと同時代人であるトリラトナダーサと考えられる。Cf. 森山(平成4年)
- (13) M.Ichigo(1985) pp.158-163.
- (14) この部分は服部(1961) p.129 注(8)に訳出、解説される。
- (15) 松本(1978) p.136 (13) に以下の通り同定される。AAA p.636, 14-15 avisamvādako nyāyaḥ paramārtha iti, Cf. PV II. (量) 3ab pramāṇam avisamvādi jñānam. しかし、この主張はAAAでは反論者のものであり Cf. 森山(2013) p.569 (84) 注(69)、したがって SDK4ab はジュニャー

- ナガルバの主張ではなく、ダルマキールティの見解と考えられる。この主張 (SDK4ab) への導入にあたる「道理に適ったものこそ勝義諦である」(SDV4a4) は、SDV *ad* SDK13 でジュニャーナガルバにより批判されていると考えられる。Cf. 森山 (2019) p18
- (16) karmadhāraya としての勝義の解釈。AAA p.636, 15-16 paramārtha iti paramārthaśabdena trirūpaliṅgajanitā buddhir abhidhīyate.
- (17) tatpuruṣa としての勝義の解釈 (→ SDP18a5-6)
- (18) Cf. SDP44b4 kun rdzob ni ji ltar snañ ba bshin (SDV12a2 *ad* SDK27b) shes bya ba ni sñon sum shes bya ba'i tha tshig go // 世俗は顕現するがままというのは直接知覚という意味である。
- (19) Cf. SDP37b1 tshul gsum pa'i rtags kyi mtshan ñid kyi rig pa don dam pa yin par bśad pa yin no // 三相を具えた立証因を特徴としてもつ知が勝義であるというのである。
- (20) Cf. NB2.25, 3.33, 本稿 I. (1) SDV *ad* SDK4 の解説
- (21) MAK70、シャーンタラクシタは実世俗、勝義に相応しいとする。MĀ (P161a5-b6, D148b7-149a6)
- (22) Cf. MAP p.233, 11-12 gal te tshul gsum pa'i rtags kyis bskyed pa'i blo don dam pa'i sgrar brjod na ni, AAA p.636, 14-16 nanu paramārthata iti viśeṣaṇam anarthakam. tathā hy avisaṃvādako nyāyaḥ paramārtha iti paramārthaśabdena trirūpaliṅgajanitā buddhir abhidhīyate.
- (23) Cf. MAK70ab dam pa'i don dañ 'thun pa'i phyir // 'di ni dam pa'i don shes bya //, MAP p. 233, 20 de yañ don dam pa dañ mthun pa'i phyir don dam pa ñid yin, AAA p.636 kiṃ tu sakalaprapañcaparivarjitaparamārthasyānukūlatvād yathoktabuddheḥ paramārthatvam.
- (24) Cf. SDK11b, MAV p.230ff. *ad* MAK70 don dam pa ni dños po dañ dños po med pa dañ / skye ba dañ mi skye ba dañ / stoñ pa dañ mi stoñ pa la sogs pa spros pa'i dra ba mtha' dag spañs pa'o //
- (25) PV III. 11ab tad avastv abhidheyatvāt それ (共相) は事物ではない。言葉の対象であるから。SDP22b3, dños po tsam dañ mthun par byed pa'i nañ can gyi sems ni rañ gi mtshan ñid kyi yul can gyi śes pa la bya'o // ただ事物のみと一致した本性をもつ心というのは自相を対象としてもつ知 (直接知覚) に対していわれるのである。Cf. NB1.15
- (26) SDP23b4本稿 [2-1] 眼、耳、鼻、舌、身、他者と共通しない因、Cf. 『俱舍論』(AbK) p.28, 11-13, 桜部 (1975) p.214
- (27) SDP23b4本稿 [2-1] 色、声、香、味、触、他者と共通する因、『俱舍論』Cf. 前注
- (28) この部分の注釈 SDP23b6-7 には、顕現するがままに壺などの顕現するものが実世俗諦、顕現しない、論書などによって増益された形象をもつものが邪世俗諦とされる。
- (29) その注釈 SDP23b7-24a1 には、眼などの集合体 (眼、色、光、注意力などの共働因) から [生起した感官知] という意味である。顛倒してくり返した習気の成熟から、あるいは論書から生起したものではない。
- (30) Cf. PVSV p.84, 5-6, NB I. 14 tad eva paramārthasat // 1.15 arthakriyāsāmarthyalakṣaṇatvād vastunaḥ //
- (31) bsñems, sñems pa, parāmrṣṭa, recollected, considered, referred
- (32) 共相 PVSV p.50, 2-6, pp.42, 24-43, 2-7 *ad* PV I, 76, 63
- (33) SDP24b6-7 yan dag pa kho nar don dam par 'dzin pa、瑜伽行派が真実の勝義とするのは三条件を具えた立証因による (推理) 知は (SDV4a5) 欺かない故、論理は勝義 (SDK4ab) とするからであると考えられる。
- (34) Cf. MAP pp.235, 13-237, 1 *ad* MAK72
- (35) この SDK9cd は [5-1] SDP37b4 にも再び引用され、そのことが龍樹によっても説かれると表している。Cf. *Vaidalyaparakaraṇa* 15 dgag par byed pa (bya ba?) med na 'gag pa shes bya ba med do she na / de ni ma yin no // Y. KAJIYAMA, STUDIES in BUDDHIST PHILOSOPHY (1989) p. [370]

- (36) PVSV p.105, 18.nirviṣayasya ca pratiśedhasyāyogāt, MAK72ab = AAA pp.45, 7, 838, 17. na ca nirviṣayaḥ sādhuḥ prayogo vidyate nañāḥ, Cf. AAA 639, 13 nirviṣayasya nañō'prayogena 森山 (2013) p. (76)
- (37) Cf. MAK72cd, AAA p.45, 8, 838, 18 vikalpāpāśrayatve vā śamvṛtaḥ syān na tāttvikaḥ //
- (38) Cf. SDP, SDK9 を指示する
- (39) Cf. SDP, SDK14 を指示する
- (40) Cf. LAS p.319, X.k.426, utpādam atha notpādam śūnyāśūnyam na kalpayeta / svabhāvam asvabhāvatvaṃ cittamātre na vidyate // 生起あるいは不生起を、空あるいは不空と構想してはならない。唯心において自性あるいは無自性は存在しない。LAS p.320, X.k. 440 mā śūnyatām vikalpetha māsūnyam iti vā punaḥ / nāstyastikalpanaiveyam kalpyam arthaṃ na vidyate //
- (41) Cf. MAK70cd
- (42) *Vimalakīrtinirdeśa*, Taisho University Press, TOKYO 2006 p.89, 12-18 atha khalu mañjuśrīḥ kumārabhūto vimalakīrtiṃ licchavim etad avocat: nirdiṣṭo'smābhiḥ kulaputra svakasvako nirdeśaḥ / pratibhātu tadvāpy adrayadharmapraveśanirdeśaḥ / atha vimalakīrtir licchavis tuṣṇim abhūt / atha mañjuśrīḥ kumārabhūto vimārabhūto vimarakīrter licchaveḥ sādhuḥkāram adāt: sādhu sādhu kulaputra ayaṃ bodhisayvānām advayadharmamukhapraveśo yatra nākṣar-arutaravitavijñāptipracāraḥ
- (43) ji ga, nu
- (44) Cf. MAP p.237 (1) 勝義性
- (45) [5-1] 中観派 Cf SDP37b5, 37a4 dños po smra ba 事物論者も含む Cf. NB1.15
- (46) Cf. PVSV p.105, 18 nirviṣayasya ca pratiśedhasyāyogāt, MAK72ab, AAA p.45, 7, 838, 17, 639, 13
- (47) Cf. MAV *ad* MAK70, don dam pa ni dños po dañ dños po med pa dañ / skye ba dañ mi skye ba dañ / stoñ pa dañ mi stoñ pala sogs pa spros pa'i dra ba mtha' dag spoñs pa'o // MAV *ad* MAK72, MMK15-5 を引用
- (48) 『維摩経』 p.89, 53b6 nirdiṣṭo 'smābhiḥ kulaputra svakasvako nirdeśaḥ / Cf. 本稿注(42)
- (49) Cf. PV III. 8b (眼病者の知に髪などが明瞭に顕現することがある) (sphuṭābhata, gsal bar snañ ba ñid)
- (50) Cf. PV III. 56-58 本稿 I. (1)
- (51) Cf. PVSV p.50, 2-6, 51, 5-7 *ad* PV I. 98, 99ab 陽炎 smig rgyu, marīci, marīcikā, a mirage, illusory appearance of water in a desert
- (52) 水などが実世俗であるに対し、蜃気楼などが邪世俗とされるのは、前者が水などとの判断から水という結果をもたらすことに関し欺かないからであり、後者は欺くからである。これは推理の問題である。
- (53) Cf. PVSV pp.2, 22-3, 1 sarva evāyam anumānānumeyavyavakāro buddyārūḍhena dharmadharmibhedeneti / p.105, 24-27 *ad* PV I. 205-208, VNV pp.69, 33-70, 12, MAV p.236, 4-11 *ad* MAK71-72, MĀ P187b7-188a7, D172a3-b1, 森山 (2013) pp. (74)-(84). (100) 注(66), (2000) pp.466-469, この MĀ と AAApp.638, 23-639, 1 とでは所依不成の問題に関する論議で扱われている。森山 (2011a) pp.36-40 (2011b) pp.19-25
- (54) Cf. PVSV p.106, 4-8 森山 (2013)、p. (100)、注(66)
- (55) 森山 (1992) p.131 注(52)
- (56) Cf. 本稿注(53)
- (57) ここにいう事物論者とは、例えば、NB1.15 事物 (vastu) には結果を設ける効力という特徴があるから、と主張するダルマキールティのことであると考えられる。
- (58) Cf. 本稿注(55)
- (59) Cf. 本稿 II. [1] SDV4a5 *ad* SDK4ab

- (60) Cf. PV III 213 *tatraikasyāpy abhāvena dvayam apy avahiyate / tasmāt tad eva tasyāpi tattvaṃ yā dvayaśūnyatā //* その場合、一方が存在しないことで、両者（所取能取）とも否定される。したがって、それ（知）にとっても両者が空性であることこそが真実である。
- (61) 森山 (1992) p.131 注(52)
- (62) Cf. *Vaidalyaprakaraṇa* 15、本稿注(35) PVSV p.105, 18, MAK72ab
- (63) 何故、不生は勝義ではなく世俗であるかは、以下の通りカマラシーラにより、分別知における虚偽な顕現に基づいて、それとは別ではない不生という知を得るのであるから、不生は真実ではなく世俗ということになる。Cf. MAP p.237, 11-15 *ad* MAV 72 分別も云々は [ダルマキールティによる分別知における顕現をダルミンとする不生の論証に対するシャーントラクシタによる] 答弁である。意図は以下のものである。もし、分別知における顕現を本性としてもつものが不生などであるなら、そのとき、顕現と知とは無区別であるから、それ（顕現）も、上で知を自性とするものを吟味することによって虚偽性であるといわれるから、どうして [生起などの否定が] 勝義性となるのか というのである。Cf. MAP p.237, 16-19 *ad* MAV 72 知が真実性に入っても、それにおける顕現を本性としてもつあらゆる自性は虚偽であるから、不生などは虚偽性であるといわれるから、さらにまたそうであれば、またと [シャーントラクシタは] 述べたのである。

(もりやま せいてつ 仏教学科)  
2019年11月15日受理